

表 題	教会と葬儀		
著 者	高見 晴彦		
作 成 日	2010年9月19日	最終更新	2010年9月19日
日本基督教団神戸多聞教会 修養会 2010年9月19日 神戸多聞教会			

Ⅰ. ある教会での３名の葬儀

半年ほど前のことです。ある教会で３名の教会員さんが立て続けに亡くなりました。

Aさんの例

一人目のAさんは60を少し過ぎたところでしたから、最近ではまだ若いと言われる年齢です。このかたは亡くなる前日までお元気だったのですが、その日の午前中に自宅で突然倒れ、救急車で病院に運ばれましたが助かりませんでした。死因は心臓近くの血管が破れてしまったことでした。Aさんは人格的にも信仰的にも周囲から常に一目置かれるかたで、さらに教会内外のさまざまな奉仕に携わる主要な働き手の一人でした。教会員にはすぐに連絡網が回されましたが、急すぎる死に連絡を受けた方々も初めは聞き間違いかと思い何度も確認したそうです。

連絡先は教会員さんだけではありませんでした。なにせ亡くなる前日まで教区の集まりに参加していたようなかたでしたし、知り合った人をよく自宅に食事に招くなどとても細やかなお付き合いをされる方でしたので、ほかの教会のかたや勤め先のかた、友人、同窓生など非常に幅広いかたに連絡する必要があるのです。ですからお葬式にも多くの会葬者が参列することが予想されました。教会の礼拝堂の収容人数は最大でも100名ほどでしたので、ホールに椅子を並べ、あまり広くない中庭にもテントを立ててそこにも椅子を並べました。前夜式には200名ほど、告別式にも160名ほどが参列するという、最近ではなかなか見ない規模のお葬式になりました。

Bさんの例

二人目、90も過ぎた高齢のBさんは、Aさんの亡くなられた半日ほど後に亡くなられました。もちろんこの時点でAさんのお葬式は終了していません。いや、Aさんが亡くなられた日の夜に亡くなられたのですが、Aさんの前夜式は翌日に設定されていたので、それが始まってもしません。

さてAさんのお葬式の連絡網は、もちろん教会員であるBさんの家庭にも回っていました。教会も牧師もてんやわんやであることを知っていたBさんの家族は、死亡宣告を受けて「今、教会でお葬式をしてくれと依頼するのはいろいろ申し訳ない」と気を遣いました。そこで牧師に第一報を入れる前に、自分たちで近くにある葬儀会館を持った葬儀社に連絡し、式場を予約してそこにBさんの遺体を搬送した上で牧師に連絡しました。

「先生、どうぞご心配なくAさんのお葬式におちからを注いでください。こちらの葬儀の

日程を一日ずらすとしても教会は大変でしょうから、準備はこちらで万端にしておきますので、先生は司式にだけお越しください」

驚いたのは牧師です。

「教会員なんだからそんな気を遣わずに教会でお葬式をすればいいのに。先に連絡をくれたらそう言ったのに。というか、むしろ出張する方が大変なんだけど」

そう思いながらも、Bさんの家族が気を遣ってくれていることもわかりましたし、今更そう言っても余計に気を遣わせるだけですから、ご家族が用意したように葬儀会館に出向いて司式をしました。Bさんの家族が「あまり大々的にはしたくない」と希望したこともあり、他の教会員さんは数名が参列するのみでした。

Cさんの例

三人目のCさんもこの頃に亡くなっていたらしいのですが、そのことを牧師が知ったのはCさんが亡くなられてから1週間ほど経った後のことでした。Cさんの家庭ではクリスチャンはCさん本人だけで、家族は教会との接点がほとんどありませんでした。そこでCさんの自宅で、特に宗教的なこともしないお葬式を家族でこじんまりと行った後に「あれ？そういえば教会のお墓に入ることになってるなんて話があったっけ？」と思いだして教会へ相談にきたのです。

Cさんについては後日、他の教会員さんを交えて小さく記念会をして、教会墓地に納骨することになったようです。

II. 「教会葬儀」ってなんぞや

「教会葬儀」に普遍的な定義はない

さて今回のテーマは「教会と葬儀」です。私たちは「教会葬儀」や「キリスト教葬儀」という言葉を普通に使いますが、「教会葬儀」とはいったい何でしょうか。「そりゃ教会でする葬儀でしょう」と言われればまったくその通りなのですが、では教会葬儀とそうでない葬儀の境界線はどこにあるか、と言われると困らないでしょうか。

例えば先ほど挙げた3例ですが、皆さんはどれを「教会葬儀」だと思ったのでしょうか。Aさんの葬儀は、まあ大体のかたが教会葬儀だと思われたでしょう。Cさんの葬儀は逆に、違うかなあと思われたかたが多いのではないかと思います。ではBさんはどうでしょう。そうだと思われたかたも違うと思われたかたも、微妙だと思われたかたもいらっしゃると思います。

何でそんなことが起こるかという「教会葬儀」という言葉に含まれるふたつの言葉、「教会」という言葉も「葬儀」という言葉も、語り手の捉え方によって意味の変わる多義的な言葉だからです。ご存じのように「教会」という言葉にはキリスト教の信仰共同体という意味と、礼拝のための建物という意味をどちらも含みます。「教会葬儀」という場合にそれを信仰共同体という意味でとればBさんのケースは教会葬儀っぽい。けれど建物という意味でとれば教会葬儀ではありません。

他の特殊なケースを挙げてみると、例えばクリスチャンでないかたが亡くなって、教会の礼拝堂でお葬式を行った場合、それは教会葬儀・キリスト教葬儀と言えるのか、ということです。これ、どこかでよく聞く話だと思いませんか？そうこれは結婚式議論と同じ話なんですね。現在一般的に行われている洋風結婚式を「教会結婚式」「キリスト教結婚式」と呼べるかどうかという話と同じです。他にも離島の無牧の教会があったとして、その信徒さんが亡くなったときに司式をする牧師がいないとき、教会の他のメンバーだけでお葬式を行ったらそれはキリスト教葬儀と言えるか、という観点などもあります。

ではもう一点「葬儀」ですが、これも捉え方によって非常に幅のある言葉です。近頃よくテレビや雑誌などでも見られるようになった「家族葬」や「直葬」などに対する議論でも、じゃあどこまで、何をすれば葬儀や葬式なのか、という点が論者によってまったくまちまちなのです。

その意味でも教会葬儀やキリスト教葬儀というものを一様に意味付けすることは神学的にもかなり難しい問題ですし、実際問題私たちが目の前のお葬式をする上ではあまり意味がないのですが、それでも皆さんが漠然と「これはキリスト教葬儀だなあ」と思うラインというのはあると思います。一般的に、特に私たち信徒の感覚からすれば「教会」といえばこの顔の見える直近のコミュニティを指すことがほとんどです。そうすると、ある教会で「教会葬儀」と言うときに想像されているのは、その教会の「いつもの葬儀」だということになります。ですから私たちが普通に「教会葬儀」「キリスト教葬儀」というときには「自分たちのコミュニティの一般的な葬儀」という意味合いがとても強いわけです。

他の教会との違い

そんなにそれぞれの教会で違うのか、という疑問もあるかもしれませんが具体的な例を挙げてみましょう。こちらの教会では教会員さんが亡くなられたらほとんどの場合、お葬式の式場はこの教会堂ですね。ですからBさんのお葬式について「キリスト教葬儀でない」とまでは言えないけれど、教会でしないのは普通ではないかな」と思われたかたも少なくないと思います。

けれど例えば、この教会と交流のあるT伝道所を想像してみてください。婦人会のかたは訪問されたこともあると思いますが、建物は古く、狭く、トイレの設備なども旧式で、駐車場也没有。もしお葬式で使うとなれば、とても使い勝手が悪いわけです。そのためK先生、彼女が赴任してからこのかた、数回の葬儀のうち教会堂で行ったものはないはずです。建物がお葬式に不向きだというだけでなく、地域でも滅多にないキリスト教葬儀ですから、専門葬儀社も教会施工に慣れた葬儀社也没有。ですからこの地域では必然的にお葬式は葬儀会館で行うものとなっているのですが、T伝道所のメンバーは当然にその葬儀を「教会葬儀」と位置付けているはずです。つまりはそれが、その教会のいつもの葬儀だからです。

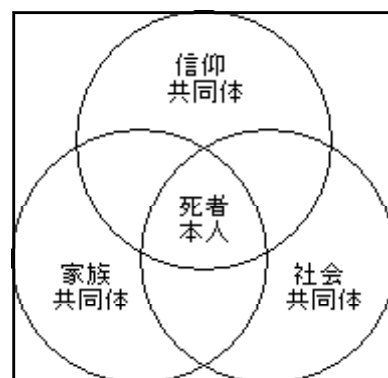
III. なぜ想いは「ズレる」のか

葬送観はそれぞれの共同体のアイデンティティ

ではある教会が「私たちの教会葬儀とはこういうものだ」というイメージを固めていたとします。それは具体的に「教会の礼拝堂でお葬式をする」とか「他の教会員はできるだけ参列する」などのほか、根本的なところで「教会員の葬儀はキリスト教式でやる」といったことであったとします。そうすると、その教会の教会員さんが亡くなったらみんなそのようにできるでしょうか。いえ、必ずしもそうではありません。

例えばCさんのケース、今回は単に連携不足ですが、もし家族が教会の存在を認識していたとしても、亡くなったかたがクリスチャンだからといって100%教会で、またキリスト教で葬儀を行うことを承諾するとは限らないのです。なぜそんなことが起こるのでしょう。

日本も現代は個人の価値観や死生観・宗教観などが尊重されるべきだという感覚が強いですから、本人が選択したものならそれでいいじゃないかという意見も少なくありません。しかしご存じのように、人はひとりでは生きられません。またある特定のコミュニティからまったく出ずに生活をするということも、現代ではほとんど考えられません。するとある人が亡くなったとき、その葬送には必然的に複数のコミュニティが関わることになります。お配りした資料に図で例示してありますが、例えばまず家族や親族など血縁者や生活協同者のコミュニティ。次に近隣の住民、仕事上の関係者、友人、趣味の同人など、社会の中で作られたコミュニティ。そして私たち信仰の仲間や教会も、亡くなった人に関わりのあったコミュニティのひとつです。



さて先ほども申し上げたように、教会葬儀は「私たちのコミュニティ、つまり教会の一般的な葬儀」です。言い換えてみれば葬儀はそれぞれの共同体のアイデンティティのひとつです。だからこそ私たちは、教会に所属している人を教会葬儀という形で送りたいのです。けれども葬儀は亡くなる本人だけに帰属する行事ではなく、遺された人々にも帰属する行事です。すると、亡くなられた人に関わりのあった共同体同士でその価値観や死生観・宗教観が違った場合、つまりこの図で重なり合う部分がごく少なかった場合、お互いの意見が食い違うことも起こってくるのです。

そのように意見の対立があった場合、どのコミュニティの判断がもっとも優先されるでしょう。よほどの状況でない限り、やはり直近の家族ということになるでしょうね。家族が反対しているのに教会が主導で葬儀を行えるということはまず考えにくいですし、できたとしても後味の悪いものになることは避けられません。

教会はどんな取り組みができるか

このように私たちは信仰の仲間を教会で送りたいのですが、それならば最低限家族には理解してもらわないといけません。だとすると、教会も日常的な取り組みとして教会員の家族と対話を深めて、いざという時には連携して事に当たれるように備えておくことが殊更重要だと言えます。

具体的には例えば教会でのイベントに参加してもらうよう呼びかけることや、相手に受け入れる意志があれば家庭訪問など顔を合わせる機会を設けることが大切でしょう。ほかにもカレンダーに教会の名前や電話番号などを印刷したものを教会員に配り、家の見えやすいところにかけてもらうという取り組みをしている教会もあります。家族の中で本人以外クリスチャンでない場合などには、その人がどこの教会に行っているかすら他の家族が認識していないこともありますから、案外こういった地味な取り組みが功を奏して、もしもの時に家族が気づいて教会に連絡してくることもあるのです。逆に凝ったパンフレットなんかを作っても、あまり読まれないものです。残念ながら家族がキリスト教にそれほど興味がないことも十分にあり得るからです。

IV. 自分の希望を的確に伝えるために

「死にゆく」とは自分を周りの人たちに委ねていく作業

さてこれまでは亡くなったかたの周囲から見ていましたが、逆の視点で死にゆく本人から見るとどうでしょう。どんなに有能な人であっても、自分自身の葬儀を行うことはでき

ません。葬儀が行われるならそれは必ず周囲の遺された人たちの手によってです。そのため「死にゆく」というのはその本人にとっては自分自身の葬送を他者に委ねていく作業であるとも言えられます。自分自身の葬儀をキリスト教で行ってほしいと思ったとき、本人は何ができるでしょうか。当然の話ですが本人は亡くなった後は何もできないわけですから、もし自分の葬送に希望があるならそのための準備は生前に行っておかなければなりません。先ほどの教会と家族の間の接点を作り摺り合わせをしていくことにしても、本当なら取り組みの主体になるのは教会ではなく本人であることが望ましいのです。

先ほどの例で言えばイベントの時には積極的に家族に声を掛けて教会へ連れてくるとか、自分の行っている教会はここで連絡先はこれだから、もしもの時は連絡するように言っておくとかです。このあたりができていれば、冒頭のCさんのようなケースはだいぶ少なくなるでしょう。

遺言と遺書

遺される予定の人たちに希望を伝えることは、とにかくまず想いを話し合うことですけれど、それを補完するためにいくつかのツールを使うことも考えられます。こうやって世間でまず取り上げられるのは遺言・遺書ですね。

ところで遺言と遺書は法律上は違うものです。まず遺言は法律的には「いごん」と読み、民法に方法が定められていて、内容も財産や認知に関わること、つまりこれこれの遺産を誰にあげたいとか、実は隠し子がいるんだけど、といったものだけが法律上有効になるものです。遺書というのは遺言の方法から外れるものや、内容が法律上の強制力のないそのほかのこと、例えば誰々に感謝を伝えておいてくださいとか、家族みんな仲良くしなさいとかそういう想いを書いたものです。お葬式の希望も、キリスト教でしてねとか、花でいっぱいにしてねという内容の場合は遺書の側ですが、例えばどここの葬儀社と契約していて負担付き遺贈という形で契約通りの施行をしてくれたら遺産からいくらかいくら支払います、という内容であれば遺言の内容になります。

さて物の本では自分の葬儀に関する希望があれば遺言で遺しておきましょう、なんて書いているものがありますが、これ実はほとんど意味がありません。さきほど言ったように、ただの希望であればわざわざ遺言に書く必要がありませんし、そもそも封印されている遺言を家族が亡くなってすぐ開けることは考えにくいのです。普通はお葬式が終わって落ち着いてからです。ですから読まれるときにはもう終わっている可能性が高いわけです。ただし、もし祭祀承継者、要は墓守などをする人ですね、これを指定したい場合は遺言は非常に効果的です。まあわざわざそうしなくてもトラブルがないことが一番ですけどね。

エンディングノート

ではお葬式の希望を伝えるにはどちらかというと遺書を使うことになるのですが、この遺書という言葉はずーっと長い間イメージの悪い言葉として捉えられてきました。まあ遺書イコール自殺なんていうイメージもさることながら、戦後の日本人は生きることを非常に大切なことだと考えるあまり、死の準備をするなどということについてはとても否定的だったからです。それでも近年は高齢化が進んだことなどもあり、ここ20年ほどでだんだんと死に向き合うということに積極的・肯定的な見方が増えてきました。そこでイメージのよろしくない遺書に代わって支持を得始めたのが、いわゆる「エンディングノート」です。現在では終わりの活動を縮めて「終活」などと言われるほど、自分の死と葬儀について考えることがブームのようにメディアでも取り上げられ、書店でもいくつもの種類のエンディングノートがコーナーを作っていることもあります。

遺書が自由書式なのに比べて、エンディングノートはある程度の項目が予め割り振られていて、何を書くかという指針になることが特徴です。ただしその分、書こうと思っていない項目にまでページが割かれていて、伝えたいことだけを端的に伝えられないというデメリットを感じる人もいます。ですから市販のエンディングノートを参考に、独自の項目を立てて一綴りにしているかたや、教会で必要な項目を考えて教会員さんに書いてもらっているところもあります。

エンディングノートを書く際の注意

エンディングノートを書くといえば、多くの本やテレビでは「自分がどういった葬儀をしてほしいのか具体的に細かく書くように」と言っています。確かに「ああしてほしい、こうしてほしい」という希望はそれぞれにあるでしょうし、自分の思いを遺せるということには安心もあるでしょう。けれど本当に有用なものを書こうと思えばそれとは違うことにも注意しなければなりません。これまでお話ししたように「死にゆく」というのは自分のその後を周囲の人たちに委ねていく作業ですから、エンディングノートを書く上で大切なのは「誰に何を委ねるのか、どんな話ができているのか」をはっきりさせておくことです。なぜなら基本的に故人の遺志というのは「こうしてほしい、という希望」でしかなく、実際に判断するのは遺された人たちだからです。

いくつかの例を挙げれば、まず自分の葬儀を中心となっていく喪主は誰にするのか。連れ合いなのか、子どもなのか、友人なのか。その人とは依頼も含めて具体的な話ができているのか。親類や関係者の了解は得られているのか。また、お葬式の司式はどの教会のど

の牧師に依頼しているのか。あるいは具体的な依頼はしていないけれど所属教会を希望するのか。家族や親族に反対する可能性のある人はいないのか。その人にどう対応するのか。喪主や牧師が説得するのか、反対があっても強行したいのか、あきらめるのか。

ほかにも、お葬式の費用、お墓の費用、教会への献金などはどうするのか。金額を想定して自分で貯めているのか、まったく遺された人の経済事情に委ねるのか。葬儀社と事前契約はしているか、お墓はすでに購入しているか、教会献金は規定額があるか、そしてそれらを相続人は知らされているか。といったことなどです。

このように、委ねるといってもただ漠然と「遺った人、お願いね～」というのではなく、誰に・何を・どのように委ねるのか、ということをはっきりとさせておき、また亡くなった後に初めて知って驚かないように、口頭でも依頼しておくほうが、実効性のあるエンディングノートになると言えるでしょう。もちろん、遺った人の主体性に任せたい場合には、そのように書いておくこともひとつの選択です。

エンディングノートの事例から見てみる

事例を少し見てみましょう。私の実家には家族共有のノートがあります。一般に言うエンディングノートは普通ひとり一冊で自分のことについて書くものですが、これは家族がランダムに書いてそれを相互に見ることができるようにしてあるものです。

さてこの中で（まだ存命ですが）私の父は実に一言だけ書いています。「何もしなくてよい。骨は適当に撒く」これだけ。これはまったく悪い見本です。遺される方からすれば「誰が何をどうせいつちゅうんじゃ！」という内容ですね。対して看護師をしていた姉の書いてあることを纏めると「事故など突然死の場合、家族が30分以内に到着しそうなら救命措置をすること。そうでなければ何もしないこと」と、こちらは細を穿ちすぎです。しかもその時になって担当医師に伝える手段がない。30分以内に家族に電話が通じたとして、「あ〜、間に合いませんから何もしないでください」なんて言えもしないでしょうし、すでにその時には救命措置に入っているでしょう。これも悪い例と言えれば悪い例です。

うちの一家はどうしてこう極端なんでしょうね。ちなみに私はといいますと「葬儀はしたい人がしたいようにすればいい。ただしする人が費用を負担すること。それで何もしないならそれでいい」という内容です。…まあ、あんまり変わりませんか。けれど一応「誰がする、何をやる、どうやってやる」ということは意識した上で、決定を委ねるという選択をしているわけです。

一番実効性のあるエンディングノート

ちなみにエンディングノートといえは普通は自分で書くものと思われていますが、私が一番実効性があるだろうなと考えている書きかたは、本人が希望を述べたものを、実際に喪主になるだろう人が記録することです。そうすれば遺される方も疑問や考えが合わないことがあればその場で確認し摺り合わせができるからです。

もちろん現在でも家族の死の準備なんか積極的に手伝いたくないという人も少なくありませんので、すべての家庭でこれができるとは限りませんが、可能ならばおそらく最善の方法だろうと思っています。

VI. 「おっかね〜」話（以下、原稿なし）

葬儀にはどんなお金がどれくらいかかるか

- I お葬式全体を通しておもに葬儀社に支払う費用
 - i 棺・霊柩車・骨壺・火葬料金など、事実上必要な費用
 - ii 生花飾り・受付・スタッフの人件費など、式典を行うための費用
 - iii 参列者への御礼品や献花など、お葬式を一般公開するための費用
- II 飲食費・宿泊費・交通費などの周辺費用
- III 教会への献金や牧師・オルガニストへの御礼など
- IV 御花料などの返礼の費用
- V 墓地・墓石・家庭祭壇など後の祭祀に関する費用

シャローム式典社の2009年度の平均額は647,781円（最大842,620円、最小494,450円）
直近の家族を除いた会葬者数は推定平均30名前後？

教会献金規定の課題

自由にすると迷う人が出てくる／定額にすると無理をする人が出てくる

日常的な特別積立をしておいて光熱費やオルガニストの御礼などに当てる工夫も重要

お花料という風習の捉え直し

香典が本来持っていた死者に香を献げるという意味合いは薄れている

相互扶助が中心であれば教会でも活用すべき

もらったら必ずお返しを、という発想が不要

VII. 気になる話題

散骨

法律上はグレー

撒く場所に気を付ける／細かく砕く

手元供養と家庭祭壇

身につけるペンダント、自宅置き用オブジェなど

法律上は入口OK、出口グレー

カトリックでは比較的受け入れられている／牧師と要相談／キリスト教書店系でも販売